

JICA's world

APRIL 2010 No.19

4

特集

スポーツの力

「人間力を育むもう一つの現場」





ブータン王国の古都プナカのゾン(寺)は二つの川が合流する中州に建っていた。一本は白波がたけだけしい流れで、もう一本は緩やかな広い川だ。まるで陰陽二つの蒼い流れが寺を守っているようにだと見とれていると、けたたましい爆竹の音が聞えてきた。絵巻祭典、ツェチュが始まるのだ。

パサツプと呼ばれる刀を腰に刺した戦士が、疾風のごとく馬にまたがり邪気を払う。中庭からは管楽器の音色が響き渡り、老若男女、山岳部族の女性はヤクを連れ、子どもたちは踊りを見ようと眼を見開いている。仏教の教えを説く仮面舞踊が始まった。

ブータンの祝日は、親戚が集まって、遊び、食べ、遊び、食べを延々と続ける。さすが、経済よりも人の幸せを第一に据える国だけあって、あくせくしない。

祭りの日はその対極だ。人の憤怒や執着の形相を表した仮面舞踏。激しく旋回する錦の衣。心底「たまげた」と口を開けて観劇する人々の心は、雪解け水のように澄んでいるに違いない。

「静と動、陰と陽の対極で世界は成っている」と、壁に描かれた曼荼羅まんだらの仏が諭すようにほほ笑んでいた。

春 夏
秋 冬

19

4月 仮面舞踏ツェチュ

ヒマラヤ 遅い春の絵巻祭典



Contents

02 春夏秋冬 ヒマラヤ 遅い春の絵巻祭典

04 特集
スポーツの力
—人間力を育むもう一つの現場—

特別インタビュー 王 貞治 氏
スポーツを通じて新たな道を切り開く スリランカ
小中学校に体育教育を広めよう モロッコ
パレスチナ難民の青少年たちに希望を ヨルダン
スポーツから学んだこと
スポーツで国際協力してみよう!



20 ゲンバの風 黒木 豪 日系社会青年ボランティア
22 PLAYERS One for all, All for one NPO法人ロシナンテス

24 地球号の子どもたち
**保健室からつながった
エジプトと豊橋の輪**



26 ココロとココロ 村の養護施設を地域の子どものための交流の場に オヴァ・ママの会
~届け 私たちの思い~
28 JICA に聞きたい! ハイチでも活動したJICA国際緊急援助隊。
どのように派遣されているの?
29 JICA UPDATE
30 イチオシ!

31 地球ギャラリー インドネシア
原点にある暮らし
—身も心も裸のダニ族—



39 MONO語り アマゾンの森を守るグリーンナッツオイル
40 MY ACTION 北澤 豪 サッカー解説者



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙 撮影：久野真一／JICA
シンハラ人に交じって、バレーボールの練習に励むタミル人の女の子。スリランカでは長年続いた民族紛争が終結。民族融和に向けて、スポーツを通じた交流が一つのツールになりつつある



「みんなが打席に立てる野球、みんなにチャンスが与えられる野球」



王 貞治 氏

Sadaharu Oh
福岡ソフトバンクホークス 会長



photo by Kenshiro Imamura

代名詞である一本足打法で通算ホームラン868本という前人未達の偉業を成し遂げ世界にその名をはせてきた、王貞治氏。記憶に深く刻まれた現役時代の活躍。そして、劇的な勝利で日本代表を初代王者に導いたWBC（ワールド・ベースボール・クラシック）。世の人々にたくさんの夢と希望を与えてきた『世界の王』が地球の未来のために取り組むこと—それは、“誰にでもチャンスが与えられる野球”を広めていくというものだ。野球の素晴らしさを誰よりも知る王氏だからこそ世界に伝えること、伝わることもある。

おうさだはる
1940年東京都出身。早稲田実業高校卒業後、読売巨人軍に入団。22年の現役生活で数々の記録を残し、77年には初の国民栄誉賞受賞。80年に引退後、読売巨人軍、福岡ダイエーホークス（現ソフトバンクホークス）の監督などを経て2009年より現職。日本代表が初代王者となったWBC2006の代表監督も務めた。

1980年に現役を引退し、翌年から指導者という立場で球界に生きてきましたが、88年、一度ユニホームを脱ぐことになりました。プロの世界に入って約30年、それ以前も含めたら、私の人生は野球そのもの。そんなことを振り返ったとき、自分を育て上げてくれた「野球」を通して社会に恩返しをしたいという気持ちが出てきました。

でも自分に何ができるのか。いろいろな人と話をする中で、まさに自分が学んできた野球の素晴らしさを、次代を担う子どもたちにも伝えていきたいと思うようになったのです。そして90年、野球を全世界に普及させていく「世界少年野球推進財団」※の設立を決意しました。アメリカ・メジャーリーグのホームラン王、ハンク・アロン氏との共同提唱で始まったこの活動は、全世界の子どもを対象としています。アジアやアフリカなど地球上にはまだまだ野球を知らない国がたくさんある中で、もっと多くの人に野球を楽しんでもらいたいという気持ち

ちがとでも強かったのです。また、「みんなが打席に立てる」チャンスがある平等なスポーツを世界の子どもたちに伝えたいと考えたからです。私たちは年に1度、世界中の少年少女に、バットの振り方やボールの投げ方、盗塁、バント、内野・外野守備、スライディングといった野球の基礎を教えています。これまでに、インドネシアやフィリピン、ケニア、ウガンダ、ジンバブエ、アルゼンチンなど延べ86もの国・地域から少年少女が参加しました。また、開催地の文化や伝統に触れる交流事業にも力を入れています。というのも、国際交流は、子どもたちにとっても意義深いものだと考えているからです。言葉が通じなくても、子どもたちは同年代というだけですぐに打ち解けて、仲良くなるんですね。ああ、そうか。子どもにはこういった「場」を与えることがとても重要なんだと。野球という一つのスポーツで、子どもたちが世界とつながって視野を広げられる。なんて素敵



世界少年野球大会では、自ら指導に当たることも ©WCBF



王氏が率いたWBC2006日本代表は見事優勝を果たした ©EPA=時事

※日米のホームラン王、王貞治氏とハンクアロン氏の提唱により、野球の普及・発展、青少年の友情と親善の輪を広げようとの趣旨で始められた世界少年野球大会を契機に設立。

平等にチャンスがめぐってくる!

熱戦に沸いたバンクーバー冬季五輪。その余韻に浸る間もなく、いよいよ6月にはサッカーワールドカップ・南アフリカ大会が開幕する。世界中が興奮の渦に包まれるスポーツの祭典が目白押し。今年2010年は、まさしくスポーツイヤー。日本国内も桜前線が一気に北上し、初夏の陽気が近づくと今日。スポーツを思い切り楽しめるシーズンがやって来た。

スポーツの醍醐味はなんといっても爽快感。スポーツが好きなのはもちろん、苦手な人でも一度は味わったことがあるはず。でも実際のところ、人々を引き付けるスポーツは、私たちにとってどんな

スポーツの力

人間力を育むもう一つの現場

人生一度は、スポーツに魅了されたことがあるだろう。そう、スポーツには多くの人の心を引き付けてやまない。無数の可能性が秘められているのだ。そしてこの10年の間に、人づくりや国づくりに有効だと注目され始めてきたスポーツ。その知られざるチカラとは。

編集協力：岡田千あき・大阪大学大学院人間科学研究科准教授



スポーツができること

- 1. 教育**
初・中等教育における心身のバランスのとれた発育や、青少年を取り巻く課題の解決にスポーツが広く活用されている。
- 2. 健康**
心身の健康の維持のみならず、人々が健康に対する興味・関心を持つきっかけとして期待されている。
- 3. 公衆衛生**
医療費の削減や衛生環境の改善など公衆衛生問題への包括的アプローチを可能にする。
- 4. HIV/エイズ**
HIV/エイズの予防教育、感染経路や症状に関する正しい知識の習得、エイズ発症者に対する偏見や差別の解消などがスポーツの場を活用して行われている。
- 5. 環境**
スポーツを通じて環境問題や生物多様性に関する啓発が行われている。特に、近年注目を集める「スポーツツーリズム」や自然資源の保護など開発分野との関係は深い。
- 6. 経済開発**
スポーツ用品の生産、インフラ整備、イベントの開催などスポーツ関連産業の発展が新たな雇用を生み、地域経済を活性化させることが期待されている。
- 7. 紛争解決**
紛争中・紛争後に被害を受けた人々が、スポーツという構造化された場に参加することにより、緊張や暴力、トラウマといった問題の緩和が期待されている。
- 8. 民主化教育**
民主主義の基盤となる他者への尊敬、寛容、公平などの考え方をスポーツから学び、紛争の解決法を共に見つけるための訓練の場となっている。
- 9. 難民・国内避難民**
スポーツを通じて難民・国内避難民へのケアを行うとともに、特に難民キャンプの多民族、多宗教、多言語の環境下における融和を目的とした活動が行われている。
- 10. 平和構築**
対立関係にある民族が互いを知る第一歩としてスポーツを通じた交流に期待が高まっている。
- 11. ジェンダー**
性別による差別や搾取、ハラスメントや暴力に対する問題意識の形成や課題解決を目指したスポーツ関連活動が行われている。

出典:United Nations (2005) "Report on the International Year of Sport and Physical Education"を参考に岡田改編。

スポーツはこんなふうに役立っている!

Bosnia and Herzegovina 一紛争下の子どもたちの気晴らしに

1992年から3年に及んだボスニア・ヘルツェゴビナの内戦。市街戦で学校は閉鎖、家に閉じこもった生活の末に生まれたのは"another war" (もう一つの戦争)。ストレスのたまった暮らしの中で家庭内暴力が横行し

たのだ。これを危惧したある地方自治体は、特に外出が限られた子どもたちを対象にサッカーができる機会を提供。笑顔で思い切り芝の上を駆け抜けた子どもたちの表情はさすがにささのものだったという。

Brazil & Namibia 一国に勢いと誇りを

いまや世界経済をけん引する新興国ブラジルから目が離せない。しかし、これ以前にブラジルの存在感を世に知らしめたのは、なんといってもサッカー。サッカー王国たるブラジルの勢いが経済成長を後押ししたという見方もあるほどだ。また、『Namibia on

the Map』(ナミビアを世界地図に)を合言葉に、2000年以降、スポーツ振興を通じて国のプレゼンスを高めようとするナミビア。ブラジルのように、スポーツが国民に誇りを与える手段となり得る。

ンスが取れた成長にスポーツは不可欠。その意味でスポーツには、生活の満足度(Quality of life)を高める効果もあるのです。そして岡田さんは、スポーツに秘められたこんな可能性をも指摘する。「生まれ持った格差や境遇を一時的とはいえリセットできるのもスポーツのメリットです」。貧富の差が大きく、地域によっては差別的行為が数多く存在する開発途上国ほど、貧しい状況から抜け出したり、社会的な成功を取めたりすることは難しい。しかし、スポーツの世界で個人的な



バックグラウンドは関係ない。「ボールひとつで解決できることもあるんです」。誰にでも平等にチャンスがめぐってくると同時に、少しでも上を目指そうとすることで個人の参加意欲や自発性を引き出してくれる―それがスポーツなのだ。

貧困のない社会への第一歩

こうしたスポーツの優位性を国づくりに応用する国際的な動きは、ここ10年で高まってきている。きっかけとなったのは2000年、国連決議で「教育、健康、開発、平和を創造する手段としてのスポーツ」が採択されたこと。また、ミレニアム開発目標(MDGs)※を受け、「開発

と平和のためのスポーツ」というレポートも国連から発表された。以来、国連には事務総長付きで「スポーツ特任大使」が配置され、紛争・復興地域や貧困地域、難民キャンプなどでスポーツ活動を推進。カナダやノルウェー、オーストラリアなどの国々も「スポーツを通じた開発」に積極的に取り組んでいる。

現在、スポーツ分野の国際協力は400事業にも上る。具体的にどんな支援ができるかは、右下の「スポーツができること」を見てほしい。あまりに広範囲で驚くかもしれないが、スポーツにはそれだけの未知なる可能性が広がっているということだ。その中で日本は、JICAボランティア

アの派遣や施設の建設・器材の供与などの直接的なスポーツ協力に加え、教育や平和構築・民族融和などを目的とした支援の中でスポーツを有効に活用している。「しかし、日本の協力はまだまだ少ない。成果が見えづらいという指摘もあります。スポーツが途上国の発展や国づくりに貢献している例もありません。だから日本としても、もっと体系立てて協力を臨む必要があると思います」。

個人、集団、社会、国。どの段階においても、人間が意欲と自信と誇りを持って目標に向かう―その姿勢こそが、希望ある国づくり、貧困のない社会への第一歩なのかもしれない。



元駐アメリカ大使
加藤良三・日本プロフェッショナル野球組織コミッショナーに聞く



「スポーツはセーフティネットの役割を担う」

日本のODA(政府開発援助)は、釣った魚をあげる援助ではなく、魚の釣り方を教え、人間という「資産」をその国に創り出すことを大切にしています。その中で、技術を磨いた人たちが将来、海外に出ていってしまわず、国内で活躍するための「セーフティネット」として、スポーツはその一翼を担うものだと考えています。草野球であれば老若男女、誰もが一緒に参加できる上、どんな状況でも必ず平等に順番が回ってくるものです。その喜びや楽しさを分け隔てなくみんなが享受できる社会があれば、きっとそれは良い社会となって、魅力ある国づくりにつながっていくと思います。

また、「人間学」を養う上でもスポーツが果たす役割は大きいでしょう。人間はもろくて弱い生き物です。そうした人間の弱さを律する枠組みの代表格がスポーツだと思うのです。スポーツで成功した人は、自分への自信を深め、責任感も強くなります。そして人格者となる場合が多い。ですから、自分の価値基準となる人間学を学ぶためにスポーツが重要になってくるのではないのでしょうか。



スポーツには人と人の心をつなぐ不思議な力がある。スリランカでバレーボールは国技、クリケットは国民的人気のあるスポーツの一つだ

スポーツを通じて 新たな道を切り開く

2009年5月、四半世紀にわたる民族紛争が終結したスリランカ。
今まさに復興の真ただ中にあるこの国が取り組むべきことは、国の未来を支える“人づくり”。
それに多大な貢献をしているのが、青年海外協力隊が取り組む“スポーツ”だ。



光り輝く島、スリランカ

2月中旬、コロンボ空港に降り立つと、もわっと生温かい空気が肌に触れた。目を開けていられないほどの強烈な日差し。「ちょっと前までは涼しかったんだけどね。これからどんどん暑くなるよ。人々は口々にそう言う。冬真ただ中の日本から来ると、その暑さがジリジリと突き刺さるように痛く感じる。

光り輝く島「スリランカ」は、シンハラ語でそう表現される。旧首都コロンボから海岸線を南下していくと、なるほど、この言葉に象徴されるように、キラキラ光る美しい海が見えてきた。

しかしここは、2004年のスマトラ沖大地震・インド洋津波災害で多くの人が命を落とした場所。被災した状態のまま、骨組みがむき出しの建物が残っている場所もある。車窓を眺めながら当時の惨劇を想像するだけで、背中がゾクゾクとした。

バレーボールで民族融和を

「エカ、デカ、エカ、デカ（イチ、ニ、イチ、ニ……）」

グラウンドを走る子どもたちの元気な掛け声が、真っ青な空に響き渡る。南部州の州都ゴー

提案だった。「ボール一つあればできる。それがバレーボールだったんです」。

「次は、一つずつボールを持ってきて」

準備運動の後は、サーブ、レシーブ、トスの練習だ。

佐藤さんとはにかく、基礎練習に時間をかける。すべては試合に勝つため。に必要なこと。どの子の瞳も真剣そのものだ。「最初はボールが一つしかなくて、ゲームしか練習ができていませんでした。でもきちんと基礎から固めていくためには、ある程度の数が必要でした」。しかし、やはり高価なもの。「どうしようかと悩んでいたら、日本の友人とNPO法人フレンドリー岐阜の方が協力してくれることになって」。今では、佐藤さんの仲間の思いが詰まった10個のボールで練習に励んでいる。

スニルさんの思いは「とにかく強いチームにしたい」。でも佐藤さんは、「勝負」に強くなるためには、練習を強化するだけではだめ。スポーツマンとして、規律を守ることこそ大事だと考えた。「グラウンドにはゴミをポイ捨てしない」「練習中はガムをかまない」「大きい子



ゴールに向かう途中の海岸線には、所々に津波の爪あとが残っている

「一日中、施設で過ごしていると、精神的に不安定になってしまったり健康にもよくない。でも太陽の下で体を動かせば、心身ともにリフレッシュできますよね」。

「何とかその状況を改善しよう」と、石垣さんがスタッフのラシカー・ギーターニさんと取り組んでいるのが、スポーツを通じてレクリエーション活動だ。「一日中、施設で過ごしていると、精神的に不安定になってしまったり健康にもよくない。でも太陽の下で体を動かせば、心身ともにリフレッシュできますよね」。



(上)スパイスの袋詰めにも関わらず、終わりのない作業に、何を思っているのだろうか
(下)石垣さん(30歳・山形県)は日ごろから入所者とのコミュニケーションを欠かさない。「真正面から向き合っていると、だんだん心を開いてくれるようになります」

「スポーツをする」と、気分が落ち着くんです」と話すのは、入所者のスシラ・マーガレットさん(34)。うつの症状があり、部屋の隅で涙を流していることも多いという。「実は、今までスポーツはあまり経験がなかったんです。でも、サユリが丁寧に教えてくれて、だんだん楽しくできるようになりました」と笑う。また、「クリケットが一番好きなの」とはにかみながら話してくれたのは、シンギティ・クマリーさん(19)。「みんなで一緒にできるのが、とてもうれしいんです」。

「スポーツをしている時、彼女たちは施設の中とは別人のよう。本当に生き生きとしています。友達を作ること、ルールを守ること、みんなで協力してやること。学ぶことはたくさんあって、更生のツールにもなっています」

スポーツには不思議な力がある。タミル人とシンハラ人の子どもたち、そして、更生施設で過ごす女性たちを見ていて、そう強く感じた。彼らは確かに、スポーツを通じて自らの問題と向き合い、新たな道を切り開こうとしていたからだ。

そして帰り道、狭い路上でクリケットを楽しむ少年たちと出会った。彼らのはつらつとした笑顔にも、この国の未来の可能性を見たような気がした。

(右) 体育担当のラシカーさん(左)と入所者たち。みんなで過ごす楽しい時間。自然と笑顔がこぼれてくる
(左)「サユリティーチャー!」石垣さんの周りにはいつも人が絶えない



は小さい子に教えてあげる」後片付けはみんなでする」。当たり前前の子ができていない子どもたちに、厳しく伝え続けた。最初は嫌がりたりズルをしたりする子もいた。しかし、次第に彼らは変わっていった。

そしてもう一つ、佐藤さんが力を入れてきたことがある。それは、バレーボール部をタミル人とシンハラ人の交流の場にするのだ。この学校はスリランカでも珍しく、両民族が同じ校舎で学んでいる。しかし授業は別々に行われているため、

「生懸命練習しているところを見てからでしようか。みんな声掛け合ったりと、自然とお互いを思いやる心が生まれてきているようです」

現在、チームの最高成績は全国三位。もちろん、目指すは全国制覇だ。でも佐藤さんは、「負けてもいいんです。みんなで協力して一生懸命やること、喜びや悲しみを分かち合うことに意味がある。でもそれができるようになれば、簡単には負けない自信があります」。

「バレーボールの面白さは、

「外で身体を動かして心身ともに健康に」

炎天下のグラウンドでほてった体が冷めないまま、6時間かけてコロンボに戻った。市内に入ると、あちこちで軍の検問に遭遇する。のんびりしたデニヤの雰囲気から一転、車を止められるたびに、ピリピリした雰囲気を感じる。この国では当たり前前の光景なのだろうか。

市街地から南へ約30分、国内で唯一、女子専用の更生施設「メッセワナ女子更生施設」がある。聞き訪ねてみることにした。裁判所から送られてきた軽犯罪者(売春、麻薬、窃盗など)や浮浪者、精神障がい者、知的障がい者などが収容されているこの施設。年齢は18〜60歳、常時約230人が生活する。親に虐待や性的暴行を受けていた人もいれば、身寄りがいない人もいる。

JICAは1980〜90年代にかけて、体育、保健師、手工芸、美術などの青年海外協力隊

(右) ボールの掛け時計は佐藤さんのもの。「時間を守る習慣がないため、練習もルーズになりがち。常に時間を意識する習慣を身に付けさせるためのものです」
(左) 佐藤さんの仲間から贈られたボールは子どもたちの宝物。「大切にすぎず、実は数個は倉庫にしまっているんです」



佐藤さん(38歳・北海道)の話を真剣に聞く子どもたち。「厳しいけど、先生のごことは大好き!」



講習会で配布された資料に熱心に目を通す出席者たち

会

「小学校にも体育を普及したい」。そう考えた3人は、自ら活動の場を小学校にも広げていった。しかし、「体育なんか必要ない」と考えている先生が圧倒的に多い中で、一人一人の意識を変えていくには時間がかかる。「できないからやらない」というのではなく、体育の重要性を分

が生まれた。濱野さんいわく、「日本の中学生より運動能力が格段に低い。小学生時代の運動経験の少なさが影響しているんじゃないかと思ったんです」。モロッコの小学校では、週2回、体育がカリキュラムに組み込まれている。しかし、体育用具がない、教えられる人がいないなどの理由を付けて、ほとんど授業が行われていないのだ。

「これからドッジボールを始めます！」子どもたちは慣れた様子で2つのチームに分かれ、早速、ゲームが行き交うボール。力いっぱいボールを投げる子、真面目か

ペットボトルと紙で作ったオリジナルの道具で、体育の授業を受ける子どもたち。すべては協力隊員のアイデアだ

小学校で体育の授業が受けられない

「ピーッ!!」コンクリートのグラウンドに、青年海外協力隊の根波優司さんの笛が響き渡る。

「これからドッジボールを始めます！」子どもたちは慣れた様子で2つのチームに分かれ、早速、ゲームが行き交うボール。力い



小中学校に 体育教育を広めよう

日本の小中高では当たり前前の「体育」の授業。しかし開発途上国では、進学に直接つながらない科目は後回しにされがちだ。モロッコも例外ではない。そこで立ち上がったのが、体育を指導する3人の青年海外協力隊員だった。



ら受け取る子、少し怖そうに逃げ回る子。どこにでも見られる、体育の授業風景だ。ここは、アフリカ大陸の北の果て、モロッコ。根波さんは2008年6月から、世界遺産都市・マラケシュ郊外の町シジャウアで、中学校の体育の質向上を目指して活動が続いている。「体育の授業はあるんです。でも、指導者の育成やカリキュラムの構築、体育用具の不足など問題は山積み。体育を「教育」として定着させること。それが僕の活動です」。

研一さんが体育隊員として奮闘していた。根波さんを含む彼ら3人の活動先は、いずれも円借款によって建設された学校だ。JICAの支援を通じて、04年より、都市部から離れた5つの農村地域で101校の校舎が新設され、スポーツ用具などの物資も供与された。しかし、インフラだけあっても、指導者がいなければ教育は成り立たない。そこで各地域の教育省支局に派遣されたのが、根波さん、濱野さん、室井さんの3人だった。

体育講習会で日本のノウハウを伝える

2月17日、根波さんの活動地、シジャウアで体育講習会が開催された。出席者は彼の呼び掛けで集まった、小中学校の先生、教育支局の関係者ら50人近く。教育支局のアデラヒム・モクタ

ど、日本の授業は一つ一つの活動に意味がある。体育は「スポーツ」である前に「教育」なんです。見習うべきところがたくさんあります」と関心を示していた。



間を尊ぶ心が学べる体育は重要。講習会を通じて、一人でも多くの先生が関心を持ってくれれば」と大きく期待していた。午前中は3人の隊員により、ビデオや表を用いて、日本の体育教育についてのプレゼンテーションが行われた。根波さんの巡回先の一つ、イブン・シナ中学校のエルヤズディ・カリド校長は、「子どもの身体的な成長を促すための体力テスト、学習カードを使った授業の振り返りな

デルワヒド校長は、「ユウジが来てから先生たちの意識も少しずつ変わりつつありますが、まだ彼に頼り切ってしまう。私が彼の信念を継いで、シジャウアのモデルとなる体育教育ができるように努めたい」と意欲を語ってくれた。モロッコの青い空の下、子どもたちが体育の授業で元気に駆け回る。そんな光景が、一日でも早く、あちこちで見られる日が来ることを願う。

(上) 体育講習会の出席者らに手作りの体育用具を紹介する濱野さん
(左) 子どもたちに指示を出す根波さん。何をしても、まずはルールをしっかり教えてから、実技に入るのが彼の方針だ
(右) 日本の支援で建設されたシジャウアのファラビ中学校。「遠方の生徒のために女子寮も併設し、学校に通える子どもの数が確実に増えました」とケラリ・エル・ハッサン校長



スーフ・キャンプの少年たちも、以前より真剣にサッカーの練習に取り組むようになってきた

力隊の角田^{すみだ}さんが、グラウンドの少年たちの動きを見つめる。学校の授業がすべて終わる夕方、10〜16歳の少年たちを集め、基礎技術の向上やチーム練習などを行う。学校の時間が短く、公園などもほとんどない難民キャンプでは、少年たちが放課後の時間を無駄に持て余すことが多い。「何かに一生懸命打ち込み、目標に向かって努力するという経験を、サッカーを通して彼らに伝えたい」。そんな思いを、角田さんは抱いている。

活動当初は、チームのボールを誰かが勝手に持ち帰ってしまったり、窮屈な難民キャンプで育った故のフラストレーションからか、ささいなことでもよくけんかすることもあった。その

近代的なビルが建ち並ぶ首都アンマンの外れ。難民キャンプではないが、パレスチナ難民とその子孫が多く住むスズハ地区にあるスズハ第3女子小中学校の1室は、まさに体育の授業の真っ最中だった。

「もっとひざを引き付けてー!」「そう、上手だね!」

女子生徒たちがマット運動の

生徒の心を育む より充実した情操教育を

「うまくなって試合に勝ちたいのなら、まずはそうした基本的なことから。試合結果より、その過程を経験し人として成長していくことが大事なんです」。

その厳しさと愛情に満ちた指導は、今後、ますます熱が入りそうだ。

イスラム教の国、ヨルダンでは、女性が人目につく場所で運動する光景はほとんど見られない。難民居住地のような閉鎖的な場所であれば、なおさらだ。球技の経験がなく、ボールを投げ、捕ることができない子、縄跳びを一回も飛ばない子も珍しく

多く、授業は午前と午後で分けられている。さらに、音楽・図工といった生徒の心の発育に欠かせない情操教育の一部が行われていない。体育は女性教員が一人いるが、授業のための用具などが不足し、適切な指導も思うように実践できていない。そこで土岐さんがパートナーとして、生徒が楽しみながらできる運動、体育用具の有効活用、授業計画の作成など、さまざまなアドバイスを送っている。

いつも故郷パレスチナがある。そんな我慢の生活、先の見えない日々の中、彼らの心を潤し、希望をもたらすもの、それがスポーツなのかもしれない。彼らがスポーツを通して見せた目の輝きは、必ずや未来への大きな糧となる。

(上) 体育の授業で生徒にマット運動を教える土岐さん
(下) 柵を使って鉄棒の練習をする小学生たち。難民が通う学校では、体育の授業に適切な用具や場所が、まだまだ不足している



from
JORDAN
ヨルダン

元国体選手の角田さん(23歳・兵庫県)。その経験を生かし、難民キャンプの子どもたちにサッカーを教える

パレスチナ難民のための女子小中学校で、体育の授業を担当している土岐さん(43歳・愛知県)。学校の冬休み期間には、近隣校とのドッジボール大会も企画した

つらい難民生活を 乗り越えるために

「前へ出せー!」「こっちだー!」

コンクリートの簡素な集合住宅が続く町並みに、元気な声が響き渡る。町の一角にあるアスファルトのグラウンドで、少年たちが真剣な表情でサッカーボールを追いかけている。

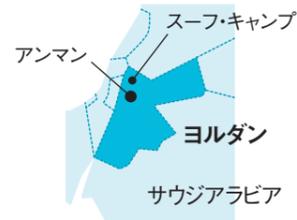
遺跡で有名なヨルダン北部の観光都市・ジェラシユの郊外。中心部には小さな商店が数多く並び、人々や車が行き交う。郵便局や警察、病院もあり、一見、普通の町のようなのだ。しかしこの町が特別なのは、約2万人の住民が、アラブ諸国とイスラエルとの長年の紛争で故郷を追われた「パレスチナ難民」だということ

と。ここは、ヨルダン全土に10カ所ある難民キャンプの一つ、スーフ・キャンプだ。

1967年の第3次中東戦争で逃れてきたパレスチナ難民のためにできたスーフ・キャンプ。初めは荒野でのテント暮らしだったが、国連などの支援で水道や電気も使えるようになってからは、病院や学校などが建てら

れ、キャンプは町となった。とはいえ、貧困や高い失業率、人口増加に伴う衛生環境の悪化など、人々の暮らしは厳しい。学校も足りておらず、授業はやむを得ず午前と午後の二部制になっており、1人1日数時間程度しか受けられない。

2009年6月よりここでサッカーを指導する、青年海外協



最初の難民がヨルダンに移り住んでから半世紀以上。難民キャンプで生まれ育った少年たちの心の中には、まだ見ぬ故郷・パレスチナがある



ベンハミンさんにとってスポーツとは…

人間性を高めるもの

「礼儀を正すこと、仲間を大切にすること、時間を守ること、感謝の気持ちを持つこと…」これらは、私たちが練習を始める前と終わった後、欠かさず唱えている道場訓の一部です。空手を始めた当初は、練習に遅れてもあまり気にせず、仲間とのあいさつなどもおろそかになっていた気がします。でも今は、青年海外協力隊・橋本憲治さん(25歳・山口県)の指導のもと、「精神を鍛え、人間性を高めていくことを怠ってはならない」という空手の考え方に触れ、私自身、多くを学んでいます。つらく厳しい練習を毎日こなすだけの忍

耐力もつきました。橋本先生からは、ただ受け身で練習するのではなく、「なぜこの練習が必要なのか」、「この技を身に付けるには何が 필요한のか」といったことを常に考え、主体的に練習に取り組むよう、繰り返し言われています。今では、指示を待たなくても各自が自発的に練習しようとする姿勢が全体に広がっています。一番うれしいのは、国内外の大会などでそうした努力が実り、好成績を収めた瞬間。仲間の中から中米地域の国際大会でメダルを取った人が現れるほど、技術レベルも上がっています。



スポーツから学んだこと

世界各地で、JICAボランティアとともにスポーツや運動の魅力を実感している人々がいる。彼らはそこから何を感じ取っているのだろう。



マイマさんにとってスポーツとは…

健康な体づくり

今、エアロビクスにすっかり夢中になっています。初めは「大変だろう」と不安だったのですが、インストラクターである青年海外協力隊・野村奈々さん(30歳・愛媛県)の「体を動かすことは楽しいですよ!」という言葉にやる気もらい、日々前向きに取り組んでいます。実はトンガは、世界的に見ても肥満者の割合がとても高い国。生活習慣病にかかる人も急増しているそうです。だから、楽しく運動しながら丈夫で健康な体をつくっていくエアロビクスは、トンガ人の健康管理にはとても効果的だと思っています。最近

は周りの人にも「一緒にやろう」と声を掛けています。一人だと大変なことも、仲間同士でいつも支え合えば、きっと続けられますから。「朝起きるときひざが痛くなくなった」、「体重が減った」と、喜ぶ友人たちもいます。それでもなお私たちの国では、学校の体育の授業すらあまり普及していないのが現状です。ナナが私たちに教えてくれているように、運動はやらされるものではなく、健康のために自ら前向きに楽しみながら取り組むもの。こうした活動が、トンガで少しでも多く広がってほしい、そう願っています。

クウォンさんにとってスポーツとは…

信頼関係を築くもの



サッカーの審判員に必要とされるものは、選手が全力でプレーできるよう試合をコントロールし、かつ彼らの安全に配慮しながら競技を円滑に進めるための高いマネジメント能力です。しかしカンボジアでは、反則のときにただ笛を吹いているだけで、試合全体を見渡せる審判員は少なく、選手や観客も勝敗だけに注目がちです。選手と審判員、または選手同士がお互いを尊重し合う雰囲気もあまりありません。私はフェアプレーの精神を身に付け、状況を少しでも改善したいと考え、今、日本のJリーグなどで豊富な経験を

持つ元審判員のシニア海外ボランティア・唐木田徹さん(52歳・北海道)から、国際レベルの審判員としての知識・技術、求められる姿勢、考え方などを学んでいます。「カラさん」が自らの行動で示してくれた、「時間を守る」、「グラウンドは常にきれいにする」、「一試合ごとに反省し、次に生かす」といった紳士的な態度や真摯な取り組みを、審判である私たちが率先すること。これらの積み重ねが、選手からの信頼感へとつながり、結果的にスポーツマンシップにのっとった良い試合を作り出すのだと感じています。

ジュードさんにとってスポーツとは…

社会性を養うもの

発達遅滞やダウン症、自閉症などの障がいを抱える子どもたちが通う学校で、体育を教えています。理学療法士の青年海外協力隊・森由隆さん(29歳・奈良県)が定期的に学校を訪れ、ストレッチや筋力トレーニング、バランストレーニングといった、障がい児のための運動やリハビリテーションの方法を指導してくれています。体育の授業の目的は、体力の向上や障がいの悪化を防ぐことだけではありません。私が森さんと行っているのは、レクリエーションやおもちゃを取り入れることで、子どもたちが楽しみながら学べる授業。

この取り組みを通じて彼らは、自分の意思で物事を決める力、問題を解決する力、コミュニケーション能力など、彼らが社会に適応していくために必要な多くの力を養っています。さらにこうした力は自信にもつながっていて、最近ではより熱心に授業に取り組む子どもも増えています。また、保護者の授業参観も実施し、子どもの障がいや発達についての理解を深めてもらう機会をつくっています。これからも体育を通じて子どもたちの成長を促し、家庭や地域とともに彼らの積極的な社会参加を実現させていきたいと思っています。

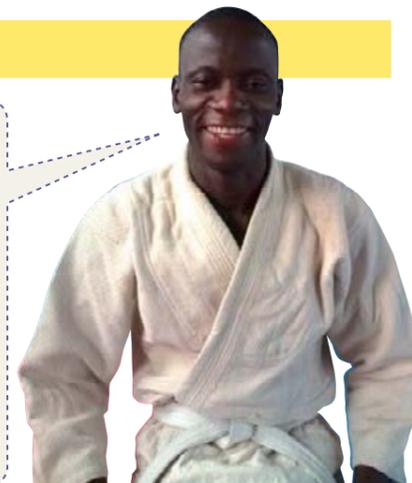


ファビアンさんにとってスポーツとは…

世の中に役立つための術

警察学校の指導教官をしている私が、現職の日本の警察官でもある青年海外協力隊・北條吉伸さん(42歳・岩手県)から教わっているのは、護身術や逮捕術としても有効な実践的な柔道。特に関節技といった犯人逮捕などに役立つ技を身に付けられるのは、これまで適切な逮捕術を学ぶ機会がなかった私たちマラウイ警察にとって、大変有意義です。でも、ただ技を覚えて強くなるだけでは、「術を通して心身を鍛える」という日本武道の神髄を学んでいるとはいえません。先生や練習相手に対する感謝の気持ち

を表す「礼」の心。そして道場やモノを大事に使うことの大切さ。こうしたものを私は柔道を通して知りました。練習場は、量もない簡素な道場ですが、「使う前よりもきれいに」を合言葉に、稽古の後には必ず掃除をしています。「鍛えた力を良い行いのために使い、世の中に役立つ人にならなければならない」。北條先生がよく口にする柔道の理念です。教官として私が警察官を指導するときには、必ずこの精神を伝えていきたい。それは、社会の平和を守る私たち警察官が忘れてはならない、とても大事なことからです。





水泳イベントに参加した子どもたちと田中さん(左端)と萩原さん(右端)
©WORLD SWIM AGAINST MALARIA

[ワールド・スイム・アゲinst・マラリア]

www.worldswimagainstmalaria.com/

「泳ぐことで救える命がある」—マラリアに苦しむ人々を救うことを目的とした、国際的チャリティー水泳イベント。日本では、**井本直歩子さん**、**岩崎恭子さん**、**柴田亜衣さん**、**田中雅美さん**、**中村真衣さん**、**萩原智子さん**、**源純夏さん**、**森隆弘さん**、**山本貴司さん**などの元五輪スイマーが中心となり、国内の水泳大会などで募金活動を行っている。集まった募金はすべて、マラリア予防のための蚊帳を購入する資金に充てられる。2010年6月25日には、世界中で一斉に「ワールド・スイム・アゲinst・マラリア2010」が開催される予定。



スタジアムでエチオピアコーヒーを販売するフー太郎の森基金のスタッフ
©フー太郎の森基金



[ベガルタ仙台のコーチをエチオピアに]

NPO法人フー太郎の森基金 × ベガルタ仙台

NPO法人フー太郎の森基金と今シーズンJリーグのJ1に復帰を果たした**ベガルタ仙台**の共同企画。サッカーを通じた国際貢献として、2011年1月にベガルタ仙台のコーチをエチオピアに派遣しサッカー教室を実施する。派遣費用はサポーターからの募金と、スタジアムで販売されるエチオピア産のコーヒーや雑貨の収益で賄われる。「サッカーをしたくてもできないエチオピアの子どもたちに接することで、指導する姿勢にも変化が起きてほしい」(ベガルタ仙台)。募金方法についての問い合わせは、フー太郎の森基金事務局(TEL:0244-38-7820)まで。

[スマイル アフリカ プロジェクト]

www.sotokoto.net/smileafrica/

月刊「ソトコト」と**高橋尚子さん**(シドニー五輪女子マラソン金メダリスト)が協働で行うプロジェクト。日本国内でサイズの合わなくなった運動靴を回収し、貧しくて靴が買えないケニアの子どもたちに贈っている。集まった運動靴は、JICAの青年海外協力隊などを通じて、現地の子どもたちに直接届けられている。また年1回、首都ナイロビで「ソトコト サファリマラソン」を開催。高橋さんも参加し、マラソンを通じて現地の人たちと交流している。「第2回ソトコト サファリマラソン」は2010年5月23日。運動靴の回収方法についてはHPを参照。

ケニアの子どもたちと交流する高橋さんとダグラス・ワキウリさん
©スマイル アフリカ プロジェクト / 鈴木勝



タンザニアの難民キャンプの子どもからタスクを受け取る瀬古さん ©EKIDEN for Peace 2010

[EKIDEN for Peace]

「難民に適したスポーツは何か」。この問い掛けに答えるべく、**瀬古利彦さん**(元五輪男子マラソン代表)が舵を取り、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)と国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)がタンザニアの難民キャンプで駅伝を企画。「タスク」をつなぎながら走ることで、スポーツの楽しさ、仲間とともに一つのことに取り組む意義などを体感してもらおうのが目的。また、日本国内でもチャリティーマラソンを開催し、アフリカと日本がつながっていくことの意義を若者たちに伝えている。今年2月にはブルンジ国境近くの難民キャンプで第2回目を開催。**有森裕子さん**も参加した。

アンコールワット国際ハーフマラソンで、車椅子の男性を励ましながら走る有森さん
©ハート・オブ・ゴールド



設立10周年記念誌「共に育つハート・オブ・ゴールド10年の歩み」を発行

[NPO法人ハート・オブ・ゴールド]

www.hofg.org/

有森裕子さん(バルセロナ五輪女子マラソン銀メダリスト、アトランタ五輪女子マラソン銅メダリスト)が代表を務める国際協力NGO。主にカンボジアを活動拠点とし、アンコールワット国際ハーフマラソンの運営協力をはじめ、カンボジア人の手によって国づくりができるよう、人材育成の分野に

力を注いでいる。また現在、JICA草の根技術協力事業(パートナー型)「小学校体育科教育振興プロジェクト」を通じて、カンボジアの小学校で体育科教育の本格的実施に向けて取り組む。日本にもカンボジア教育省の担当官を招致し、学校機関などで研修を実施している。

特集
スポーツの力
—人間力を育むもう一つの現場—

スポーツで国際協力してみよう!

スポーツと国際協力。

— 一見、かけ離れたものであるようだが、

実は世界の人を幸せにできる身近なアプローチの一つだ。

ここでは、スポーツに携わる人々が行う国際協力を紹介。

スポーツ好きなあなたも、自分なりの参加方法が見つかるかもしれない。

©KTP



JICAオフィシャルサポーターとして、世界各国を訪問している北澤さんと伊達さん

©JSM



[JICAオフィシャルサポーター]

JICAオフィシャルサポーターを務めるのは、サッカー解説者の**北澤豪さん**とプロテニスプレーヤーの**クルム伊達公子さん**。スポーツの最前線で活躍する二人だ。定期的に開発途上国を訪問してJICA事業の視察などを行い、日本国内で途上国の現状を伝えている。また訪問時、北澤さんはサッカーを、伊達さんはテニスを通じて、現地の子どもたちと交流を図っている。(裏表紙に関連記事)



プロスポーツチームもスポーツ用具を寄付

[JICA「世界の笑顔のために」プログラム]

JICAが年2回実施する物品寄付プログラム。途上国が必要とされている「モノ」を日本国内で募集し、JICAが派遣中のボランティアを通じて世界各地へ届ける。募集品目にはスポーツ用具も多く、これまでに**ガンバ大阪**、**柏レイソル**、**湘南ベルマーレ**、**大宮アルディージャ**、**日本プロバスケットボールリーグ**なども、シーズン中に使用したボールやユニホームなどを寄付。今年度の募集の詳細は29ページを参照。

[認定NPO法人柔道教育ソリダリティー]

www.npo-jks.jp/

「世界の子どもたちが皆、平等に柔道ができるように」と、リサイクル柔道着の寄贈、指導者の派遣、外国人選手や指導者の受け入れなどを行っているNGO。理事長は**山下泰裕さん**(ロサンゼルス五輪男子柔道無差別級金メダリスト、現東海大学教

授)。活動地は、中国、ロシア、イラン、ラオス、南アフリカ共和国など幅広い。今年3月には、山下さんが建設計画からかわった「日中友好南京武道館」が日本の無償資金協力により完成。開館記念として、山下さんが地元学生に柔道の稽古を行った。

海外の子どもたちに熱心に指導する山下さん。現役引退後は、海外でも柔道の普及に努めている ©柔道教育ソリダリティー



教員としての視野を
広げたい

青い空に緑の天然芝、舞い上がる白球。そして、土で汚れたユニホームで懸命にボールを追う少年たち。野球を愛するものにとってはこたえられない風景が、そこには広がっている。ここは、ブラジル・サンパウロ市から北西へ約100キロのインディアナポリス市。日系企業の大きな工場もあり、多くのブラジル日系移民とその子孫が住む。町のグラウンドで練習に励んでいるのは、この町に住む日系少年たちによる野球チームだ。

「次、サード行くぞ!」。守備のノック練習でバットを握るのは、2009年7月から町の野球少年の指導を行っている、日系社会青年ボランティアの黒木豪さん。鋭いゴロの打球が少年のグローブをはじいて転がっていく。苦笑いしてゆっくりボールを拾いに行く選手に、黒木さんが叫んだ。「最後まで手を抜くな!プレ―はまだ続いているぞ!」

小学生時代に野球を始めた黒木さん。夢は、「甲子園出場」と「プロ野球選手になること」。まさに「野球少年」だった。めきめきと実力をつけ、野球の名門、横浜高校に進学。厳しい練習の末、高校2年のときには選抜高等学校野球大会に出場する。そ



「高校時代、素晴らしいチームメイトに出会えたことに感謝している」という黒木さん。ブラジルの教え子たちにも、野球を通じてかけがえのない仲間を作ってほしいと願う

して、夢だった阪神甲子園球場のグラウンドで、4番打者としてチームをけん引し、見事、全国準優勝へと導いた。その後、大学でも野球部で活躍した黒木さん。惜しくもプロ入りの夢はかなわなかったが、その青春は常に野球とともにあった。

大学卒業後は、公立中学校の保健体育講師として勤務。だが、多感な生徒たちと日々接する中で、野球中心の生活を送ってきた自分の「視野の狭さ」を痛感する。「生徒の気持ちに共感し、いろいろな視点からアドバイスを送ることのできる、広い視野を持った教員になりたい」。そんな思いを胸に、黒木さんはいったん仕事を辞め、日系社会青年ボランティアとしてブラジルへ渡った。

日系社会青年ボランティア
Kuroki Go

黒木 豪さん

黒木さん(後列右端)の粘り強い指導で野球に取り組み姿勢が大きく変わったチームは、全国大会で見事三位に輝いた



かけがえのない経験
そして仲間たち

初めは、日本とはあまりに異なる野球への取り組み方にとまどうばかりだった。驚いたのは、遅刻の多さ。練習初日、選手が何時間待っても現れなかったときには、「怒りを通り越し、あきれただだ笑うばかりでした」。また、ごみをグラウンドに捨てる、用具を乱暴に扱う、あいさつや返事ができない、ミスをした仲間を露骨に批判するなど、野球をする以前の問題が山積みだった。「技術さえあれば、試合に勝てさえすれば良いという空気があり、それ以外の大切なことがおろそかにされていた」と振り返る。

黒木さんの活動は、まずはことうした一人一人の「心」を鍛え直すことから始まった。だが、ブラジルで大らかに育った日系少年たちの考え方や価値観を変えるのは容易ではない。「なぜあいさつや礼が必要なのか」、「なぜ用具を大切にしなければならぬのか」、その本当の意味がなかなか理解されず、「これも文化の違いなのか」とあきらめかけたこともあった。それでも、野球で培った粘り強さ、自ら率先して手本を見せる行動力によって、少しずつ、選手たち、そし

てほかの指導者や保護者などの理解を得られるように。今では、「野球に対する姿勢、態度が明らかに変わってきた」と感じている。

技術面でも、当初は野球の基本動作もままならなかった彼らが、黒木さんの基礎を重視した練習でどんどん実力を伸ばしていった。「練習は決してうそをつかない」との黒木さんの言葉に後押しされ、かつてない猛練習にも選手は食らいついてきた。そして、09年11月に行われた全国野球選手権大会。以前は予選で敗退していたチームが見事三位に輝く。

「コーチ、ありがとう!」
試合後、走って礼を言い駆け寄り、労が吹き飛ぶほど、幸せだった。気が付けば、思わず号泣していた。

そんな黒木さんの生き方、野球への姿勢の原点となっているのが、厳しい練習と寮生活を通して、人間形成の上でも多くを学んだ高校球児時代の経験だ。恩師であり、高校野球の名将として知られる横浜高校野球部監督・渡辺元智さんも、「人間到る処青山あり」※の精神で多くを学ぶとともに、野球で培った忍耐力や物事に対する感謝の心を広く伝えてほしい」と、地球の裏側で日々奮闘する愛弟子にエールを送る。

「高校時代、つらい練習でふと自分に負けそうになったとき、いつも苦

くろき・ごう

1985年宮崎県出身。私立横浜高等学校硬式野球部の主力として活躍。日本体育大学体育学部卒業後、公立中学校の保健体育講師に。2009年7月より、日系社会青年ボランティア・野球隊員としてブラジルへ。



(右)選手に打撃のアドバイス
(左)高校球児時代の黒木さん。元チームメイトの中には、現在プロ野球で活躍している選手も
(下)グラウンド整備に励む少年たち。こうした施設や用具への感謝の心が、良いプレーを生む



楽をともした仲間たちが支えてくれました。夢や目標を持ち、努力すること、一生感謝できるかけがえのない仲間と巡り合える。そんな「心」の通ったチームをここでも作りたい!」

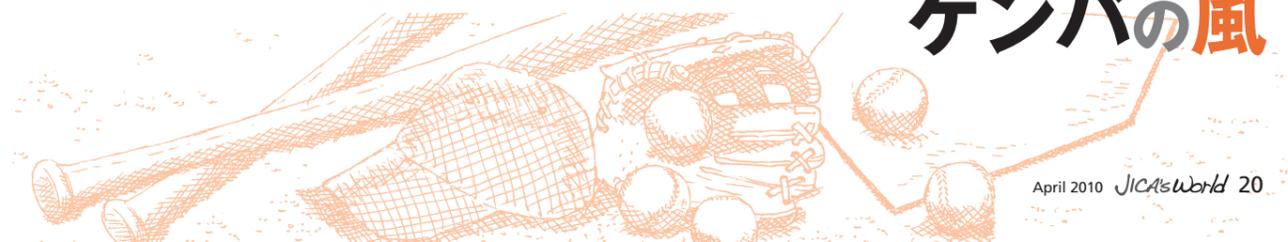
「次はブラジルナンバー1!」。黒木さんの横で張り切る少年たちの歓声が、真っ青な大空に吸い込まれていった。

※「人間はその気になればどこでも骨をうずめることができる。大きな志を持って、世界に出よう」という意味の漢詩。

「野球の『心』を伝えたい」

日系社会青年ボランティアの黒木豪さんは、かつてあの甲子園を沸かせた元高校球児。「野球を通して学んだことを、ブラジルの野球少年たちに」。選手たちと真正面から向き合いながら、日々、汗を流している。

第16回
ゲンバの風



サッカースクールの生徒とロシナンテスのメンバー（左端が海原さん、右端が川原さん）。ナショナルチームも利用するこの施設で青少年約70人が練習を行っている ©内藤順司



One for all, All for one

「非力な僕らはやせ馬のロシナンテ」。だが、彼ら自身がそう考えるよりもずっと、その活動はスーダンの人々の心強い支えになっている。かつてラグーマンで「花園」を目指していた川原尚行さんの志は、今、高校時代のチームメイトの思いとともに、がっちり「スクラム」が組まれている。

忘れられない最後の試合

NPO法人ロシナンテスの誕生は、飲み会でのこんな会話がきっかけだった。

「外務省を辞めて、スーダンで医療活動をしようと思ってるんだ」

「それなら先輩、何かお手伝いさせてください！」

5年前、外務省の医務官だった川原尚行さんの一言に、高校時代の2年後輩の海原六郎さんは二つ返事でこう答えた。普通なら、考え直すことを論じたいような決断。しかし、海原さんの目は真剣だった。

その訳は、川原さん高校3年。大阪府の「花園」で開かれる全国高校ラグビー大会の出場をかけた最後の県大会のこと。花園行きはほぼ確実視されるほど、仕上がり十分だったチームにアクシデントが起こった。攻撃（フォワード）と守備（バックス）をつなぐ要のスクラムハーフの選手が出場できなくなったのだ。そこで急きょ抜擢されたのが海原さんだった。「入部して半年、プレーヤーとしての熟練度は低く、試合で体の大きな選手につぶされ脳振とうを起こしてしまいましたが」。



サッカーはスーダンで最も人気のあるスポーツ。紛争が続くダルフルでも村のあちこちでボールを追い回す子どもを見かける ©竹林尚哉

スーダンで見つけた真実

ロシナンテスの活動の中心は、無医村だったシェリフ・ハサバツラ村に立ち上げた診療所で、地元の人々の病気やけがを看すること。医師である川原さんが、スーダン人の医療従事者に技術指導をしながら運営に当たる。また、軽視されがちな女子の教育事業や母子保健活動も行っている。4月からはJICAの草の根技術協力事業と連携して、妊婦検診や乳児検診の普及、女性の健康教育にも力を入れていく予定だ。

こうした活動の中で、ロシナンテスが大切にしているのがスポーツ事業。ダルフルという不安定な地域を抱えるスーダンだからこそ、ロシナンテスの面々はこの活動の意義を感じている。「被害に苦しんでいる人々を直接助ける方法も一つですが、子どもたちに夢を与えることも必要です」（川原さん）。

どんな協力方法が有効だろうか。多くの話し合いの末、スーダンサッカー協会主催の少年サッカースクールの立ち上げることになった。サッカーはスーダン一人気のスポーツだ。また、地方の学校への巡回指導も行う。スポーツ振興を図ることで地方と都市部の格差を縮めるとともに、

とはいえ、スクラムハーフは専門的なポジション。ほかにこなせる選手はいなかった。「お前しかない！」。川原さんのその言葉に奮い立たされるように立ち上がった海原さん。しかし、全身全霊で戦うもチームは敗れ、川原さんら3年生は引退した。「勝てるはずの相手に負けただけです。自分が何の貢献もできなかったことが悔しくて、その思いがずっと心の傷として残っていました」

それから20年余り。久々に集まった席で川原さんの決意を聞いた海原さんの脳裏によみがえってきたのは、高校時代のあの思い出。「今なら役に立てる。ポジションがあるんじゃないか」。そう思って、川原さんのサポートを申し出た海原さん。部員だったほかのメンバーも加え、今

(右)文化的背景から女子教育が軽視されがちなスーダン。ロシナンテスではまず学校建設から取り掛かった (左)宗教上、肌を露出できず自由にスポーツを楽しめない女の子に対してサッカーを指導。今では大会にも出場できるほどレベルが向上した ©内藤順司



青少年の健全な育成に貢献できる。「あるときダルフルについて聞くと、スーダン政府、国連、欧米...と、みんな言っていることが違い、何が真実か分からなくなりました。でもその中で、一つだけ確かなことがあったんです。それは、子どもたちが全員夢中でサッカーをやっていたことでした」と川原さん。

彼らの心を支えるサッカー。これなら夢を与えられる。「ラグビーに、『One for all, All for one』という言葉がありますが、スーダンの子どもたちにはまず、自分がチームにどんな貢献ができるか見つけてほしい。そして、苦しいときはみんなでフォロロしようという気持ちを持つてもらえたら。さらにその先に、国のため、アフリカのため、世界のためという心が生まれてくれればよりうれしいです」（海原さん）

試合以外では敵味方もないノーサイドの精神。体当たりの激しいプレーの中で反則せず正々堂々と戦うフェアプレーの精神。ロシナンテスのメンバーに刻み込まれたこのラグビー精神は、対立構造の続くスーダン社会で多くの意味を持つ。決して非力ではない川原さんの行動力にブラッスされた海原さんら、PLAYERSの熱き思い。それが重なり合う様子は、まさしくがっちり組まれたスクラムのように思えた。



巡回診療から始まった医療活動。診療所を拠点とする現在は、村人に限らず、周辺地域の人々にも開かれた場所となっている。村唯一の診療所。人々の川原さんへの信頼は厚い ©内藤順司



福岡県立小倉高校時代、苦楽を共にした川原さん（最前列右から2人目）と海原さん（最前列左端）。ロシナンテスの活動は、ラグビー部員、OB会、教職員など母校の関係者にも支えられている



(右) 手洗いの大切さを伝える歌「バイキン、バイバイ」を全員で合唱
(左) 「指の間までしっかり丁寧に洗います」。手の洗い方を説明する保健委員長の馬場くん(右)

保健室からつながったエジプトと豊橋の輪

子どもの健康を守るために大切な“学校保健”のシステム。その取り組みを伝えようと、JICAのテレビ会議システムを通じて、愛知県豊橋市立芦原小学校とエジプトのロダ小学校の子どもたちが出会った。



芦原小学校の保健の取り組みをエジプトへ。芦原小学校(右)とJICAエジプト事務所(左)がテレビ会議を通じて結ばれた

歯磨きの大切さ エジプトに届けたい

「こんにちは！僕たちは芦原小学校の保健委員会です！」
大きなスクリーンを前に、元氣よくあいさつするのは、愛知県豊橋市立芦原小学校の5、6年生25人。そして彼らの視線の先には、エジプトの首都カイロの南、ファウム県タメイヤ郡にあるロダ小学校の子どもたちが映っている。何やらみんな緊張した面持ち。一体これから何が始まるのだろうか。

豊橋の市街地から電車で揺られること10分、無人駅の前に広がる畑を抜けたところに芦原小学校はある。2月下旬のある日、ほとんどの児童が下校した後の夕暮れ時。保健室の周りだけ、人々が行き交いざわざわしている。カーテンで仕切られたベッド、整然と並べられた薬や聴診器など、いわゆる、普通の保健室。しかしそこには、真っ黒のスクリーンとカメラが設置されている。そう、今日ここで行われる、エジプトの小学生とのテレビ会議のためだ。

この交流プログラムは、JICAが2008年から実施している「上エジプト学校保健サービス促進プロジェクト」の一環。プロジェクトの目標は、エジプトの貧困地域の子どもの健康問題を改善するため、学校の保健サービスの質を向上すること。まずは上エジプトのファウム県をパイロット地区とし、学校保健を推進すべく、さまざまな活動を行っている。

しかし現地の先生たちと議論を進めるにつれ、「日本の学校保健システム健康ではいられない。世界には、私たちにとっては当たり前でも、そうではないことがたくさんあります。自分たちの生活を見つめ直すきっかけになったのではないのでしょうか」と根本真太郎校長。保健委員会の委員長・馬場淳也くん(6年生)は、「手洗いも歯磨きも、僕たちにとってはすべて当たり前のこと。少しでも参考になればうれしいです」と誇らしげに話してくれた。

「バイキン、バイバイ!!」
芦原の子どもたちの元氣な歌声は、確かに、エジプトの子どもたちに届いた。

始まった。

「一日は、おはよう！のあいさつから始まります」「外で遊んだ後には、必ず手洗い、うがいをします」「石けんや消毒液の交換も、僕たちがやります」「給食は栄養士さんが考えてくれたバランスのいい献立」「歯磨きのテーマは8020！80歳まで20本自分の歯を残すことが目標です」
ジェスチャーや絵を交えながら、熱心にスクリーンの向こうに訴え掛ける子どもたち。この日のために、1月から一生懸命練習してきただけに、発表にも

熱が入る。

一方、ロダ小学校の子どもたちは、エジプトの自然や食べ物、学校の掃除の時間、タバコの害などについて発表。「ピラミッドのイメージしかなかった」という芦原の子どもたちには、一つ一つの説明が新鮮だったようだ。

そして最後に、芦原小の子どもたちの健康を支える養護教諭の鈴木玉代先生からメッセージが贈られた。「健康は人間の生活を支える基盤。将来、自分の身体を自分で守れるような大人になつてください」。その言葉は、強く深く、両国の子どもたちの心に響いていた。

「さようなら！」

すべてのプログラムが終わり、スクリーンがぱっと暗くなった。あんなに緊張していた子どもたちだが、最後には達成感と充実感が生き生きと輝いていた。「日本にはモノがあふれています、それに頼り切ってしまうと心身ともに

を参考にしたい」という声があちこちで聞かれるようになりました」とJICA専門家の赤坂陽子さん。朝のあいさつ運動、休み時間の外遊び、お昼の歯磨きタイム、そして、いつも優しく迎えてくれる保健室の先生……。日本人なら誰もが経験があるが、エジプトではまだまだ普及が進んでいないことばかりだ。「学校保健の主体となるのは、子どもたち、自身。日本とエジプト、子ども同士で伝え合う機会を作りたいと思いました」。

直接会うのは難しい。そこで、テレビ会議を通じた交流が行われることになった。対象校となったのは、パイロット校の一つロダ小学校。そして日本側は、芦原小学校が選ばれた。芦原小は財団法人日本学校保健会(文部科学省後援)の健康教育推進校として日本一に輝いた名門校。児童、保護者を交えた学校保健委員会の開催や、保健だより「ウンクーネルダス」の発行など、活動も多岐にわたる。「日本の学校保健システムや活動を伝えてもらうには最適な学校だったんです」。

スクリーンの向こうに見た エジプト

そしていよいよ本番の日。エジプトと日本の時差は7時間。開始時刻になると、パッとスクリーンが明るくなった。そこにエジプトの子どもたちが映った瞬間、わあっとわき起こる歓声。遠く海を越えて、日本とエジプトがつながった瞬間だ。

早速、芦原小の子どもたちの紹介が



エジプトの食事について発表するロダ小学校3年生のサラ・マグディさん



保健室での仕事や芦原小の健康教育について紹介する養護教諭の鈴木先生



昨年9月から、両校はニュースレターを交換。事前交流として、お互いの学校生活を伝え合った





ココロとココロ
～届け 私たちの思い～
オヴァ・ママの会

村の養護施設を

地域の子どもたちの交流の場に

26年続いた民族紛争、2004年のスマトラ沖大地震・インド洋津波災害などにより、多くのホームレスが生まれたスリランカ。南部マータラ県でホームレスの子どもたちの施設を支援するNGO「オヴァママの会」は、地域との共生を目指して新たな事業を立ち上げた。

絵を通じて心の傷を訴える

今年もまた、名古屋博物館(愛知県名古屋市中区)でスリランカの子どもたちが描いた絵が展示される。今回で15回目を迎えるこの絵画展を行うのは、オヴァ・ママの会。スリランカ南部、マータラ県ケカナドゥラ村にある養護施設「オヴァ・ママチルドレンビレッジ」を支援するNGOだ。

絵画展の作品は、施設で生活する子どもたちが描いたもの。会場には、絵一枚ごとに解説が添えられる。絵そのものの紹介ではない。絵に表れる子どもたちの「ココロ」を、日本の画家が分析したものだ。

「施設の子どもたちは皆、悲惨な過去を背負い、心に傷を負っています」

そう話すのは、オヴァ・ママの会で事務局を務める赤羽一郎さんだ。

「26年続いた内戦や2004年のスマトラ沖大地震・インド洋津波災害で両親

こにはさまざまなメッセージが隠されているのだ。

心理分析の結果は、施設で子どもたちの世話をするアンマー(寮母)に伝えられ、一人一人の子どもたちのココロの傷を癒やすカギとなっている。

「オヴァ」と「ママ」の末永く続くフレンドシップ

現在、施設では23人(4～15歳)が生活している。健康や社会性、学力に問題を抱える子がほとんど。日々の生活でそれを克服していくため、絵や音楽、ダンス、国語などの先生がやって来て、子どもたち

と過ごす。家庭教師付きの恵まれた暮らし。しかしこれが、思わぬ問題を引き起こしていた。

ケカナドゥラ村は、決して豊かとはいえない農村地帯。そこに日本のNGOの支援でホームレスの子どもたちを保護する施設ができた。「それだけでも拒否反応がありました。当初は、ホームレスの子どもたちの面倒は見ない、と入学を拒否した小学校もあったほどです。そして地域の人々の施設を見る目も特別でした。地元の子は貧しくて3食満足に食べられないのに、いわば浮浪児がきれいな衣服を着て、きれいな建物の中で暮らし、おいしいものを食べているという、やっかみや嫉妬に似た思いで見えていたのです」。

何とかして、地域と施設の間に横たわる溝を埋めなければならぬ。そう考えたオヴァ・ママの会は、ケカナドゥラ村で暮らす施設の外の子どもたちへ奨学金を贈る取り組みを始めた。その資金として、JICA基金が活用されている。スリランカでは、小中学校の学費は無料。しかし、貧しさのために靴や服が買え



オヴァママの会は、年に数回スタディーツアーを実施。日本から多くの学生が訪れている



ず、学用品もそろえられずに通学できない子どもが多くいる。会が支給した奨学金は、地域の人々で構成される委員会が管理。現在、約150人の子どもたちを対象に、奨学生を選定する作業に入っている。また学習に必要な文房具も配布し、施設内にある図書室も自由に使用してもらう。そのために児童書も充実させた。つまり、施設の子どもたちとの交流を促進する目的もある。

「オヴァ・ママチルドレンビレッジができて16年、施設から社会に巣立っていった子どもは120人を超えました。本来、スリランカの問題はスリランカの人たちが自身が解決していくべき。いずれ彼らが大人になり、村の人々と一緒に生きてこの施設を支えてくれればと思います」

現地語のシンハラ語で、オヴァは「あなた」、ママは「わたし」を意味する。

「私たちはスリランカの人たちと、支援する『支援される』という関係でなく、新しい関係になりたい。友達として、仲間として、いつまでも続くつながりを築きたいのです」



1994年に建設されたオヴァ・ママチルドレンビレッジ。当時は北部で激しい内戦が継続中で、戦場から最も遠い南部のこの場所が選ばれた

オヴァ・ママの会についてのお問い合わせは事務局まで。会員には定期的に機関紙を送付。
〒470-0155 愛知県愛知郡東郷町白鳥
4-4-5-201-101 赤羽方
TEL/FAX: 0561-39-2608
Email: ginge46@attglobal.net

を亡くしたり、貧しさから養育を放棄された子どもたちが保護され、この施設に収容されています」

オヴァ・ママの会は、「ホームレスの子どもたちが安心して暮らせる養護施設をつくりたい」という、あるスリランカの僧侶の情熱に促されて92年に設立された。当時、14歳以下の子どもたち400万人のうち、約1割の40万人もが内戦などの影響でホームレスとして暮らしていた。

オヴァ・ママチルドレンビレッジには、そうした子どもたちが各地から集まってくる。「私たちが訪ねるといつもニコニコして迎えてくれます。人懐こく、甘えてくる子もいます。でも話していると、どうしても入り込めない深い闇があることに気付きます」。

絵には、そんな彼らのココロの闇が表れてくる。人の顔を黒く塗りつぶしてしまふ子、山並みをなぜか白く表現する子、そして水に浮かぶ人や家を描く子。そ



この絵を描いた少年は、両親と兄弟を目の前で殺された。顔が塗りつぶされた人物は、亡くなった4人の兄弟。過去のつらい思い出から解放されていないことが表れている



子どもたちの自由な発想に任せ、それぞれ思い思いに絵を描く

あなたの小さな一歩から始まる国際協力 世界の人びとのためのJICA基金

JICAでは、国際協力に関心のある日本の皆さまからの寄付を、開発途上国の貧困削減や環境保全への取り組みに活用する「世界の人びとのためのJICA基金」で受け付けています。皆さまのご支援をお待ちしております。

寄付金の使われ方

お寄せいただいた寄付金は、途上国の貧困削減、医療や教育の提供、環境問題の解決などに取り組むNGOの活動に充てられます。各支援活動や寄付金事業収支についてのご報告は、「JICA寄付サイト」で公表します。

寄付の方法

「JICA寄付サイト」からお申し込み下さい。クレジットカードによる決済や、銀行・郵便振込みなどお使いいただけます。JICA寄付サイトURL: <http://www.kifu.jica.go.jp/>



Q&A
JICA
に聞きたい!

Q ハイチでも活動したJICA国際緊急援助隊。どのように派遣されているの?

海外で大規模な災害が起こったとき、被災者の救助や医療活動などを行うJICA国際緊急援助隊(JDR)。20万人以上が犠牲となったハイチ大地震にも医療チームが派遣され、多くの人々を診療した。



(上)診療の順番待ちをする人々。再診に訪れる患者が日増しに回復する姿は、医療チームにとって大きな心の励みとなった
(左)日中は40度近くにもなるテント内で診療する医療チーム

JICA国際緊急援助隊事務局
緊急援助課

渡邊 利一

PROFILE
大学卒業後、2008年4月にJICAに就職。ザンビア事務所を経て、09年4月より現職。主に救助チームの訓練や研修の企画、準備、運営、関係省庁との調整業務などを担当。



「緊急援助から復興支援まで、 継ぎ目なく被災地の人々を支えています」

救助チームは決定から24時間以内、医療チームは48時間以内に出発することになっています。今回も、現地の治安状況などを確認した日本政府が15日に医療チーム派遣を決定。これを受けてJDR事務局は、医療チームに登録している全国の医師や

1月13日にハイチで起きた大地震は、世界中を震撼させるほどの被害を出し、3カ月がたった今も多くの人々が避難生活や過酷な環境下での暮らしを余儀なくされています。また、津波という形で日本列島にも緊張が走ったチリの巨大地震でも、被害が拡大しています。こうした大規模な災害が海外で起きたとき、いち早く現地入りして被災者支援を行うのがJICA国際緊急援助隊(JDR)です。

JDRは、「救助チーム」、「医療チーム」、「専門家チーム」、「自衛隊部隊」から構成されています。被災国からの支援要請と日本政府による派遣決定を受け、災害の規模や種類に応じてどのチームを派遣するかを決め、準備を進めます。ハイチ大地震では、医師や看護師など医療チームのメンバー26人が派遣されました。

地震の発生を受け、翌14日、JICAは先遣隊を被災地に送り込み、被害の規模や治安状況、必要とされる支援について調査するとともに、医療チーム派遣に備えて活動場所の選定に取り掛かりました。そしてJICA本部では、テントや毛布、浄水器など約3000万円相当の緊急援助物資の配給が行われていました。



JDRが活動したレオガン市では8割以上の建物が倒壊

看護師など約900人に、参加可否を問うファックスを一斉送信しました。そして4時間半後、応募者78人の中から24人のメンバーが選ばれ、16日夜、チャーター便で成田空港を出発しました。

一方、現地入りしていた先遣隊は、首都ポルトープランス近郊の都市、レオガン市をチームの活動場所として選んでいました。建物の8割以上が倒壊する深刻な被害を受けながらも、まだ国際的な支援が始まっていなかったからです。そして17日に到着した医療チームと合流、18日朝に診療所を設営し、活動を開始しました。医療チームは8日間で、延べ534人を診療。撤退後は、自衛隊医療部隊にサイトを引き継ぎました。

またJICAは、その後も国連を中心とした復興ニーズ調査に参加。国内でも阪神・淡路大震災の経験を生かしたハイチ復興支援の準備を進めるなど、緊急援助から復興へと続く、継ぎ目のない支援の実現に努めています。

JICA国際緊急援助隊 IEC「Heavy級」に認定

01

3月9～12日、東京都、千葉県成田市、兵庫県三木市で、JICA国際緊急援助隊(JDR)のIEC(国際捜索救助諮問グループ外部評価分類)受検が行われました。IECは各国の救助チームの実力を測るために設けられた国際的評価基準。「重(Heavy)」「中(Medium)」「軽(Light)」の3段階に分類され、JDRは最高レベルのHeavy級に見事合格しました。

今回の受検には、警察庁、総務省消防庁、海上保安庁のレスキュー隊員のほか、災害救助犬4頭、医師・看護師、業務調整員など、計71人が参加。「トリアン国ザクアス市」という架空の都市でマグニチュード7.8の地震が発生したという設定で38時間の派遣シミュレーションが行われ、世界各国から来日した11人の評価員により「マネジメント」「捜索」「救助」「医療」「ロジスティックス」の5分野で、約130項目が審査されました。

Heavy級に合格したのは、日本が世界で13番目。海外の被災地でより効果的・効率的な支援ができるよう、今後もさらに技術向上に努めていく方針です。



国内の救助活動で正式導入されていない「ショアリング」(建物の倒壊を防ぐ技術)も試験項目の一つだった

JICA四国「国際協力実践セミナー」開催

02

「アフリカで井戸掘りをしたけれど、どう計画を作ったらしいの?」「インドネシアで衛生改善の協力をしたけれど、気を付けるべき点は?」

こうした学生団体からの質問がきっかけとなり、2月19～20日、JICA四国で「大学生・国際協力実践セミナー」が開催されました。当日は四国4県から30人近くの大学生が集まり、国際協力の実務者からその実践方法を学びました。

学生時代にNGOを立ち上げた、NPO法人ACEの岩附由香代表は「学生の国際協力で、どうモチベーションを保っていくか」について講演。続いて、長崎大学の渡邊学教授が「現地の人々が、問題を自分たちで解



ワークショップで作成したプロジェクトを発表する参加者たち

決できるようにするのがいい協力」と訴え、「自立発展性」や「オーナーシップ」の重要性について話しました。さらに、JICA若手職員によるプロジェクト立案のためのワークショップ、学生たちのパネルトークなどを通じて、さまざまな形で国際協力に取り組む学生同士が意見を交換し合う場もありました。

「客観的に自分たちの活動を見直すことが大切」「他の団体の活動に刺激を受けた」「自分たちが何をしたいのか見えてきた」。このような感想を述べた参加者たちが、これからどんな活動を始めるか、とても楽しみです。

あなたもできる国際協力 参加募集!

03

青年海外協力隊
シニア海外ボランティア 募集中

JICAは、青年海外協力隊・シニア海外ボランティアの2010年度春募集を行っています。応募資格、募集分野、応募方法、全国各地で約150回開催される「体験談&説明会」(参加無料・申込不要)などの詳細は、ホームページ(www.jica.go.jp/volunteer)をご覧ください。
募集期間: 5月17日(月)まで
問: JICAボランティア募集
選考窓口
TEL: 03-3406-9900

「世界の笑顔のために」
プログラム 物品受付スタート

教育、福祉、スポーツ、文化などの関連物品をJICAボランティアを通じて途上国へ届ける「世界の笑顔のために」プログラムの募集を開始します。対象物品、送付方法などの詳細は、ホームページ(www.jica.go.jp/partner/smile)をご覧ください。

募集期間: 4月15日(木)～5月28日(金)

問: JICA青年海外協力隊事務局「世界の笑顔のために」プログラム係

TEL: 03-5226-9196

イチオシ!

M OVIE

『ジョニー・マッド・ドッグ』

冷戦後、民主化に失敗したアフリカの国々で起こった紛争では、多くの少年兵が危険な作戦に充てられた。この作品は、10年余りの内戦で破壊されたリベリアの首都モンロビアとその近郊を舞台に、不条理な戦争下で生きる子どもたちを描いた物語だ。反乱勢力の少年兵を率いるジョニーと、父親や弟を気遣って戦闘地域から逃げる少女ラオコレを対峙させながら、戦場で起こる悪夢を怖いまでにリアルに再現している。キャストに起用された15人の元少年兵の存在感が、麻薬で恐怖心を奪われた少年たちが殺りく、略奪、暴行を繰り返す姿を一層生々しく演出している。(文=高倍宣義)



©2008-MNP ENTREPRISE-EXPLICIT FILMS

2007年／フランス・ベルギー・リベリア／98分
 監督：ジャン＝ステファヌ・ソヴェール
 出演：クリストファー・ミニ、デージ・ヴィクトリア・ヴァンディ
 公開：4月17日よりシアターN渋谷ほか、全国順次公開
 URL：http://www.interfilm.co.jp/johnnymaddog

E VENT

スマトラの森 SUMATRA FOREST

世界の子どもたちが撮影した日常のひとコマを国内外で展示・発信している「ワンダーアイズプロジェクト」。今回は、世界自然保護基金(WWF)ジャパン、WWFインドネシアと協働し、森林破壊が進むスマトラ島で生きる子どもたちが写し出した作品を都内2カ所で開催。7月以降、国内各地での巡回展も予定。

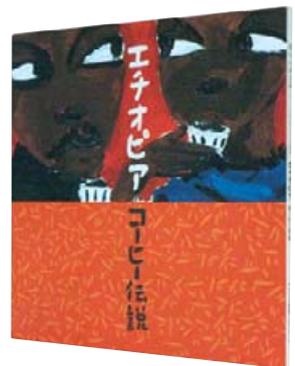
■汐留
 会期：4月22日(木)まで 9時～19時
 場所：ギャラリーウオーク・汐留メディアタワー(共同通信本社ビル)3F

■新宿
 会期：6月1日(火)～11日(金) 10時30分～19時(最終日は15時まで)
 場所：ユニカミナルプラザ(新宿高野ビル4F)
 入場料：無料
 ※環境月間の6月、展示会期中にインドネシアから人気ミュージシャンを招くイベントを予定。詳細はホームページを。
 問：ワンダーアイズプロジェクト
 Email：mail@wondereyes.org
 URL：http://www.wondereyes.org/

B OOK

『原木のある森 コーヒーのはじまりの物語』

多くの日本人に愛されるコーヒー。その発祥地の一つとされるのがエチオピアだ。6～8世紀ごろ、南西部の“カファ”地方でコーヒー豆が見つけられたという。そんなコーヒー発見の物語から、現地に古く伝わる焙煎方法やセレモニーの作法、発祥地ならではのユニークなお菓子のレシピまで、エチオピア式コーヒーの楽しみ方を知ることができるのが本書。現地の新進アーティスト、ゼリフン・セヨン氏の親しみやすいイラストとともに描かれる物語は、子どもから大人まで楽しめる。発行はファッション、料理、インテリアといった“ものづくり”を通してアフリカの人々の暮らしや文化を伝えている非営利団体「アフリカ理解プロジェクト」。



アフリカ理解プロジェクト 著
 1,575円(税込)

この本を
 1人の方に
 プレゼント
 詳細は
 38ページへ

B OOK

『実践ガイド 国際協力論』

国際協力は、ODA(政府開発援助)のみならず、国際機関やNGO、企業などさまざまなアクターによって行われており、その手法も分野も多種多様だ。本書はこうした「国際協力の仕組み」を解説するとともに、食料安全保障、保健医療、教育、環境、ジェンダーといった「地球規模の課題」を整理し、学生でも理解しやすいよう、やさしい文章で書かれている。各章末に設けられた「実践ガイド」には、国際協力の経験豊富な著者からのアドバイスが、また巻末の「就職ガイド」では、就職や転職の参考になる具体的な職種、必要な資格・能力、専門性を高めるための学会などが紹介されている。「実践を重視する国際協力の入門教材として最適」と緒方貞子・JICA理事長も推薦の一冊。



友松篤信、桂井宏一郎 編著
 古今書院
 2,625円(税込)

この本を
 1人の方に
 プレゼント
 詳細は
 38ページへ

地球ギャラリー vol.19

Indonesia

[インドネシア]

文・写真=すずき ともこ (フォトエッセイスト)

体の2倍の長さの竿を持って子どもたちは湖に魚釣りに出掛けた

原点にある暮らし
—身も心も裸のダニ族—





A. 収穫したサツマイモを主食とするダニ族。仕切りのない長屋の料理小屋には5つのいろりが並び、それぞれの家族がイモを焼きながら話に花を咲かせる
B. ダニ族の伝統的な火おこし方法。乾燥した木を足で押さえ、植物の皮を何度も前後に引いて摩擦させ、おがくずに点火させて火種を作る



A

インドネシア東部のパプア州。赤道直下、緑の山々に囲まれたニューギニア島の内陸には、今でも人間の「原点」を感じさせる暮らしがある。男性はコテカと呼ばれるベニスケースが唯一の服、女性は植物繊維で作った腰みのを身にまとっているだけだ。肌で大自然の息吹を感じ、大地から地球の鼓動を吸収して生きている人間。それがダニ族だ。



B

本語で言えば、「こんにちは」や「ようこそ」に当たるあいさつだ。浅黒い顔に深く刻まれたシワが少し厳しい表情をつくっているようにも見えるが、クリクリとした丸い瞳には親しみを感じる。彼らは木とわらでできた女の家へと案内してくれた。円形の室内、その中心にはいろりが一つあるだけ。男性は男の家に集まってタバコを吸い、ピナンの実をかみながら毎日くつろいでいる。一夫多妻制なので、暇があると妻の家を順番で回っているようだった。

ダニ族の主食は村で採れるサツマイモ。基本的にそれだけしか食べない。いろりに鍋をかけて芋をゆで、その火の回りに芋を置いて同時に焼く。たまにサツマイモの茎や葉をゆでることもあるが、そうなるに決まって競い合いになる。お祭りや特別な行事の際に食べる家畜のブタは、「大切な財産だから」と、この夜も暖かいいろりのそばに移されていた。



C. タバコはダニ族の社交の場に欠かせない。この一本で空気が和むのである
D. ブタはダニ族の一番の財産だ。大きな祭りのときにだけブタを殺して食べる



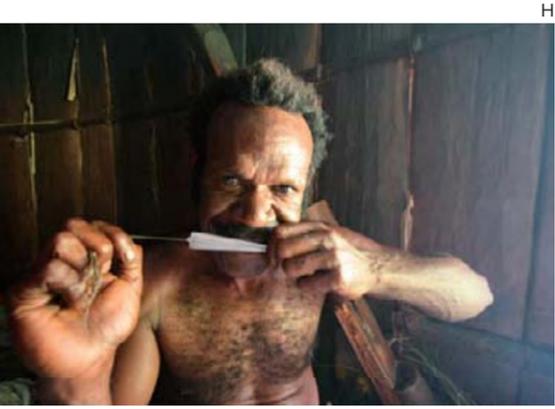
D C



ニューギニア高地の青い空とどこまでも続くのどかな風景。点在する集落の奥にダニ族の村はあった



ダニ族の村を初めて訪ねた日。身も心も裸の人々は、そこにある自然に溶け込んでいた



H



F



F



G



E.戦前の準備をする酋長。化粧は炭とブタのラードを混ぜたもの



J



K

F.酋長が高台に上がって合図をすると部族間の戦争が始まる
G.彼らがかつて、このように弓矢とやりを使って戦った
H.男性が演奏するピゴンという口琴。糸をピンピンと引きながら金属板を口の中で反響させて音を出す

I.戦いの後の祭りでは女性の手拍子のアカベラで村の男たちが踊り出す
J.学校には隣村の子どもも通うため、町の近くに住むダニ族の子どもたちは洋服を着て登校する。学校帰りにみんなで水浴びをする子どもたち。川は彼らのお風呂代わりでもある
K.「こんなに大きな魚が釣れるんだ」と披露する少年。本日の収穫高は15匹だ

ダニ族は笑い上戸で涙もろかった。厳しい顔とは反対に、とても人懐こかった。身も心も裸、自然体のままに生きる本当の人間の姿だったような気がする。

電気がないこの集落では、日が暮れるとみんながいろりの周りに集まってだんらんする。その輪に加わった私は、米粒には神が宿っているという日本の言い伝えを例えに、「サツマイモにも神様はいるの?」と尋ねてみた。すると「酋長に許しを得てからでないとその話はできない」と返事が。後に聞いた話では、神がサツマイモを実らせ増やしてくれるということだったが、そのとき初めてサツマイモの魂の話をすること自体がダニ族では秘密にされていることを知った。

翌晩のだんらんでは、酋長さんがダニ族の昔話についてゆっくり口を開いた。その話は、悪さをする山向こうの部族とやりや弓矢で勇敢に戦った末、首を取って相手を皆殺しにし、村中の人と勝利を祝って盛大な祭りをしたというものだった。この土地の部族は昔から、女性がさらわれたり、ブタが盗まれたということでも常に血みどろの争いが行われていた。その中で、ダニ族も戦闘的な部族だと恐れられていたらしい。しかし、こうして一緒に芋を収穫し、魚釣りに行き、川のお風呂で水浴びし、タバコやピナンの実をたしなみ、歌い、踊り、ピゴン(口琴)を弾き、いろりを囲んでわらの床でごろ寝しながら平和な日常を過ごしていると、こんなに優しい人たちが皆殺しの話を自慢げにするのが信じられなくなった。だがこれこそ、一つの部族、集合体を守るということなのかもしれない。



円借款で北スラウェシ州ラヘンドン地区に新設された地熱発電所



復興支援の一環として現地NGOが小学生に防災授業を実施



協力隊が開催したレクリエーション大会には約180人の小学生が参加、みんな汗を流した

JICAの活動 in インドネシア

成長の果実を 貧困削減・社会の安定へとつなげるために

民主化が進み、中進国に向けて力強く成長を遂げる一方で、高い失業率や貧富の差の拡大という問題を抱えるインドネシアでは、持続的な成長を貧困削減や安定した社会づくりにつなげるための取り組みが進められている。JICAもそれを後押しすべく、さまざまな協力を行っている。

世界的な経済危機の影響にもかかわらず、近年のGDP(国内総生産)成長率が4.5%前後と堅実な成長を遂げる一方、失業率が7.9%と高く、貧富の差も拡大し続けるインドネシア。こうした成長を貧困削減につなげると同時に、民主的で公平な社会づくりをしていくことが、今この国にとって最大の課題となっている。こうした状況を踏まえ、日本は「民間主導の持続的な成長」、「民主的で公正な社会づくり」、「平和と安定」を課題に据え支援。また、地球規模の課題である気候変動対策にも積極的に協力している。

その中で「民間主導の持続的な成長」に向けた支援の一つが地熱開発の推進。インドネシアは世界一の地熱資源量を誇るが、資金や技術力などが

不十分で開発リスクも高いことから、利用率はわずか3%程度だ。JICAでは、2025年までに現在の約8倍の発電量を目指す同国政府の取り組みに協力。これまで、技術協力による地熱開発計画の作成や円借款での発電所拡張などを実施してきた。今後はさらなる電力需要の拡大に対応するため、民間企業の投資を促進する制度改善なども行っていく。二酸化炭素の排出量が少ない地熱発電の普及は地球温暖化対策としても期待できる。

他方、度重なる自然災害に見舞われた同国に対しては「平和と安定」への協力も重要だ。昨年9月の西スマトラ州パダン沖大地震でも、多くの犠牲者を生んだ。災害復興支援事業の一つとして、JICAは地元NGOと協働し、

5つの復興支援プロジェクトを実施中。子どもたちの心のケア、耐震建築物の普及など、被災者が元の生活を取り戻すための支援を続けている。

また、短期(1~4カ月)の青年海外協力隊も派遣。被災後の精神的ストレスから子どもたちが早く立ち直れるよう、レクリエーション大会の開催など体を動かして楽しめる場づくりに取り組んでいる。

■JICAの協力実績(人数ベース) 2009年3月31日現在

	2008年	累計
研修員受入	1,643人	37,273人
専門家派遣	390人	11,498人
青年海外協力隊	24人	560人

事務所開設 1969年

イスラム教徒の数は世界最大規模。首都ジャカルタには東南アジアで最大のモスク、イステクラルがある。



地下に眠る豊富な天然ガスが国の基幹産業を支える。日本へも多く輸出されている。



世界最大級の仏教遺跡ボロブドゥール遺跡群。このほかインドネシアには、6つの世界遺産がある。

大小18000近くあるとされる島々は、多様な動植物の宝庫。固有種も多く生息する。



首都：ジャカルタ
面積：189万km²(日本の約5倍)
人口：約2億2,800万人(2008年)
公用語：インドネシア語
宗教：イスラム教88.6%、キリスト教8.9%、その他ヒンズー教、仏教、儒教など
1人当たり国民総所得(GNI)：2,100ドル(2008年)
経路：ジャカルタ、バリ島などへ直行便がある。周辺島へはジャカルタからの移動が便利。
通貨：ルピア(IDR)1ルピア=約0.01円(2010年3月現在)
気候：赤道直下に位置し熱帯性気候。季節は乾期(5~10月)と雨期(11~4月)に分かれる。

インドネシア料理 ゆで野菜のピーナツソースがけ「ガドガド」



インドネシアは多数の島々と民族で成り立ち、食文化も千差万別だが、熱帯気候により生ものを避け、焼き物、揚げ物、いため物などが多いのが特徴。また、豊富なスパイスも不可欠だ。

東京・北青山にあるバリ・インドネシア料理店「プリマデ」では、バリ島出身のシェフ、マデさんの「おふくろの味」が味わえる。本格的な地元バリの家庭料理にこだわったメニューがそろっている。

この店の人気メニューの一つ、ゆで野菜のピーナツソースがけ「ガドガド」は、どの家庭の食卓にも並び、国民に人気のおかずだ。シンプルながら、香ばしく甘い辛いピーナツソースは、ゆで野菜と相性抜群。「お好みでも好きな野菜を入れて楽しめます」。手軽に作れるインドネシア料理としてぜひ試してみてください。

〈ガドガド〉

〔材料(4人前)〕

〈具〉キャベツ／小松菜／もやし／いんげん

／ニンジン／厚揚げ／卵

〈ソース〉ピーナツバター500g／生ピー

ナツ50g／水2ℓ／黒糖大さじ3／ケ

チャップマンニス(とろみのある甘い醤油)大

さじ3／塩少々／ニンニク1個／タマネギ

1個／赤唐辛子4本／クンチュール(シヨ

ウガの一種)3個

〔作り方〕

1. 具をゆで、適当な大きさに切り、盛り付

ける。

2. 生ピーナツを油で揚げ、ミキサーにか

け、皿に分けておく。

3. ニンニク、タマネギ、赤唐辛子、クンチュー

ルをミキサーにかける。

4. 鍋にサラダ油を入れ、3を香りが出る

までいためる。

5. 4に2と水、黒糖、ケチャップマンニス、塩

を入れ、火が通ったら止める。

6. 5にピーナツバターを加え、よくかき混

ぜ、盛り付けたゆで野菜の上にかける。

☆揚げた海老せんべいをトッピングしても

OK。



Bli Made (プリマデ)

〒107-0061
東京都港区北青山2-12-27 ハレクラニ北青山 2F
TEL:03-5410-1933 URL:http://blimade.net
11時半~15時 / 17時半~23時(土曜はランチなし)
定休日:火曜日

スポーツは世界を豊かにできる！

中学2年生だったある夏の日、自分のエラーで負けた試合の後、悔しさと情けなさで、ベンチの片隅で一人おえつをもらっていました。そこに、最後まで全力投球したエースピッチャーの先輩が、1学年下の私の肩を抱いて声をかけてくれました。「友成、泣くなよ。一生懸命やったんだろ」。彼にとつてこの日は3年の夏、最後の試合。先輩の顔をふと見上げると、そこにはとびきり爽やかな笑顔がありました。練習では誰よりも声を出し、仲間を叱咤激励し、見えないところでも黙々と練習に励んだ先輩。そのまぶしすぎる笑顔に圧倒され、逆に涙が止めどなくあふれ出てしまいました。

これは中学時代に在籍した野球部時代の思い出です。ベストを尽くした人の偉大さ、尊さを知りました。スポーツを通じた自分の人格形成につながったように思います。

スポーツは娯楽、と位置付けられがちですが、人間として大事なことを多く学べる人間教育という側面もあると思います。ウガンダで活動したある青年海外協力隊員は、昔の日本の教育現場で当たり前だった「時を守り、場を清め、礼を正す」ことを野球指導を通じて浸透させ、子どもたちを立派なリーダーに育てました。

日本は、バンクーバー冬季五輪の多様な競技に多くの選手を参加させたスポーツ大国です。選手たちの頑張りに声援を送り、一喜一憂した方も多いのではないのでしょうか。スポーツは、人間教育のみならず、人々に生きがいを与え、喜びや感動を生み、豊かな社会を作ることが出来ます。

スポーツに接する機会が少ない途上国において、日本ができることは多岐にわたります。今月号の特集「スポーツの力―人間力を育むもう一つの現場―」がそのヒントになればと思います。

広報室広報課長 友成晋也

本誌へのご意見・ご感想や
JICAへのご質問を
お寄せください。

プレゼント
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報は統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2010年5月15日

Email: jica@idj.co.jp
FAX: 03-3582-5745 (『JICA's World』編集部宛)

- ① グリーンナッツオイル
- ② 書籍『原木のある森 コーヒーのはじまりの物語』(p30参照)
- ③ 書籍『実践ガイド 国際協力論』(p30参照)



①



②



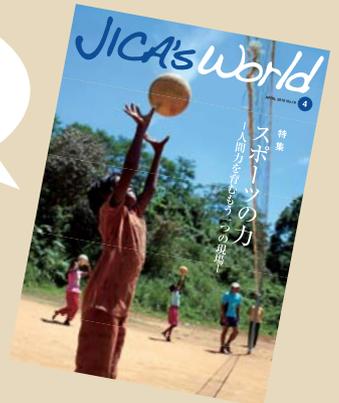
③

本誌をご希望の場合は
送料ご負担にて
お送りいたします。

申込方法

氏名・住所・電話番号・ご希望の号数もしくは送付期間を明記の上、下記にお申し込みください。お支払方法をご案内いたします。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 業務部(発送代行)
住所 〒107-0052 東京都港区赤坂2-13-19 多聞堂ビル
TEL 03-3584-2191
FAX 03-3582-5745
Email order@idj.co.jp



次号予告 (2010年5月1日発行予定)

相互依存の世界

グローバル化により世界が相互に依存し合う現代。
日本人の生活がいかに海外とつながっているかを特集します。

JICA's World

APRIL 2010 No.19

編集・発行/独立行政法人 国際協力機構 Japan International Cooperation Agency : JICA

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル1～6階
TEL : 03-5226-9781 FAX : 03-5226-6396 URL : http://www.jica.go.jp/

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



©Yuki Asada

アマゾンの森を守るグリーンナッツオイル

きれいな星形の莢^{さや}をつけた、グリーンナッツと呼ばれる植物がある。中の種は良質な脂肪分を豊富に含み、搾ると淡い黄金色に輝くオイルが採れる。原産はアマゾンの熱帯雨林だ。

今、その熱帯雨林で問題となっているのが、違法伐採や農民の焼き畑などによる、森林資源の破壊。近年、森林面積は急速に縮小しており、その貴重な生態系が危機^{ひん}に瀕している。

そんな中、注目されているのが、農地に樹木を植えて森林を育てながら、樹間でナッツやフルーツなどの農作物を栽培するアグロフォレストリー。森林保全と農業を両立させた、環境に優しい耕作方法だとされている。

このアグロフォレストリーでグリーンナ

ッツの栽培に取り組み、ペルー東北部の熱帯雨林保護とオイル生産による農民の生計向上を支援しているのが、NPO法人アルコイリスだ。

「グリーンナッツで人々が収入を得られれば、これまで生活のためにやむを得ず行っていた焼き畑も少なくなる」とアルコイリスの大橋則久さん。JICAの草の根技術協力事業を通じて、農民に栽培方法や搾油技術を伝えている。

グリーンナッツは、先住民の間で食用として愛されてきたという。そこから生まれるオイルの味わいは、風味が良くてさわやか。体内で燃焼しやすく、成人病の予防やダイエットにも有効だ。

アマゾンの豊かな恵みが今、オイルとなって原生の森を守ろうとしている。



(上)栽培管理や害虫対策を学ぶ農民
(右)特徴的な形のグリーンナッツの莢



問：アルコイリス
TEL：03-5215-5531
URL：<http://www.arcoiris.jp/>
グリーンナッツオイルはHPで購入可能。

★グリーンナッツオイルを2人の方にプレゼント。
詳細は38ページへ→





そこにサッカーがあったから

サッカー解説者 北澤 豪

KITAZAWA TSUYOSHI



PROFILE

1968年東京都出身。読売サッカークラブ・ジュニアユース、本田技研工業サッカー部を経て、読売クラブ(現東京ヴェルディ)に移籍。日本代表としても活躍。現役引退後は、サッカー解説者の傍ら、国内外の若者へのサッカー普及に取り組む。2004年よりJICAオフィシャルサポーター。著書に「サッカーが子どものこころを育てる」(実業之日本社)。

現役時代から、開発途上国の子どもたちにサッカーを教えています。きっかけは「そこにサッカーがあったから」。世界中どこに行っても、サッカーがあれば不思議と通じ合える。サッカーに携わる者として、選手を夢見る子どもたちに、何かできることがあればと思ったんです。

日本と途上国では、「スポーツ」の位置付けが違います。アフリカの子どもたちに聞くと、「有名になってお金を稼いで、親孝行したい」とか、僕らとはゴールがまったく別の場所にあるんです。だからこそ、底知れぬパワーを感じる。ボールもスパイクもない。そんな中から選ばれて這い上がって行く彼らは、まさにその国のヒーローなのです。

パラグアイの学校に行った時、100人に1個しかボールがないのを見て驚きました。50対50でゲームをやるわ

けにはいかない。どうするのかと思って見ていたら、エアでドリブルの練習を始めたんです。すごかった。モノがないなりにどうにかしようとする底力には、目を見張るものがあります。

南アフリカ共和国では、アパートヘイト※の名残でしょうか、コーチが命令するような指導をしていて、子どもたちは「怖いから言うことを聞いている」という印象を受けました。もちろん、ときには厳しさも必要ですが、「なぜそれが大切か」を教えることが大事。グラウンドの掃除にしてもそう。「自分の夢をかなえる場所をごみ箱にしちゃだめだろ」と説明すれば、自然とみんなでごみ拾いをしよう!という声が上がってきます。

スポーツ分野で、日本が途上国に伝えていくべきことはたくさんあると思います。実技以外にも、指導力、分析力、大会の運営方法などはすべ

て、子どもたちの能力を引き出し、伸ばしていくために必要なことです。そして何より、スポーツは「人間力」を育みます。勉強ももちろん大切ですが、それだけでは隣にいる仲間を思いやる気持ちは生まれません。僕自身、人生に必要なことはすべて、サッカーを通じて学んだといっても過言ではありません。

2010年のサッカーワールドカップは、初のアフリカ大陸での開催となります。世界とアフリカがつながる大きな一歩一。現地の子どもたちも、今まで夢見ていた“世界”をより近くに感じられるのではないのでしょうか。そしてこの大会をきっかけに、少しでも多くの人が、アフリカのために何ができるかを考えるようになってくれることを期待しています。

※南アフリカ共和国で行われた白人と非白人の人種隔離政策。1994年に完全撤廃された。